

社会福祉法人 長春会
たちばな保育園
園長 長野春信

OECD（経済協力開発機構）乳幼児期の保育・教育

乳幼児期の保育・教育が国際的な議論になっています。東京大学大学院教育学研究科教授秋田喜代美先生、OECD 教育局教育訓練政策課 田熊美保先生のお話を引用し、お話しさせていただきます。

OECD とは経済協力開発機構です。国際経済について協議する OECD のような機関が乳幼児の保育・教育問題に強い関心を寄せる背景には、主に三つのグローバルな動向があります。第一に、乳幼児期の保育・教育への公的投資が社会的・経済的に極めて有効な政策手段であることが、子どもの発達を長期にわたって追跡調査する縦断研究で実証的に示されてきたこと。

第二に、男女共同参画社会への手だてとして母親の就労が重要であり、母親が働けるためには、子どもを預ける保育所・幼稚園の質が問われること。

第三に、第二次世界大戦後間もなく世界的に広まった保育所・幼稚園での保育・教育が、OECD 参加国では概ね定着し、各国で多様な施設が生まれており、そこで改めて乳幼児期の保育・教育の質とは何か、が問われているからです。

そして、それぞれの国が政策として何を優先的に打ち出すかは、どのような価値を乳幼児期の保育・教育において最も育てるべきものと志向するかによって異なります。その志向を大きく二つのモデルに分類すると、就学準備の指導に重点を置く英米型、子どもの主体性と権利を保障する北欧型と言えます。北欧のような社会福祉の手厚い国では、社会全体で子どもを育てる発想が強く、就学準備というより市民としての子どもの主体性、権利の保障が重視されているといえます。

最新の脳科学研究では、脳の臨界期、つまり活発に物事を吸収する時期は4歳より前なのです。0歳から6歳まで脳を含めて継続的にいろいろなものができあがっていく人間形成の土台作りの時なのに、教育は3歳以降からとしているのは勿体ない話です。脳は0歳から学ぶことを欲しています。

ただ、ここで「幼児教育が大切です」というと、日本では「漢字を覚えさせ

る」とか「算数のドリルを始める」だと誤解されますが、OECD 諸国の研究からそういった「詰め込み」の効果は、小学校低学年で消えてしまうという結果がでています。ですからこの段階で重要なことは「遊び」です。イギリスでは、「先生に指示をされて行動をする」と「子どもが自ら行動を選ぶ」の双方が必要であり、また、保育者が主導する活動の割合よりも、子どもが主導する活動の割合のほうが高いが、実は両方とも大切で、その二つのバランスのとれていることが良質の保育であることが実証されています。

今、日本では保育所は保育を、幼稚園は教育をするものと分かれています。しかし、教育とは漢字や英語、算数を学ぶことでしょうか？はたまた幼稚園の教育はそういうことに特化しているのでしょうか？答えはNOであり、多くの保護者は誤解しているのだと思います。保育園が目指す教育も幼稚園が目指す教育も本質は同じです。幼児教育で研究が進む 国立大学附属幼稚園のカリキュラム、日々の生活、教育方針などはまさにそれだと御分り頂けると思います。

たちばな保育園は、園長挨拶でも触れさせていただきましたように、今しかない、5歳までしか経験できないことをたくさん経験して頂き、

「正しいことを、素直な心で、真直ぐに」貫ける大人

になっていただきたいと思います。